

## 3つの海外実習を振り返って

医学科6年41番 工藤由佳

私は次の3ヶ所の病院・研究室で海外実習をさせていただきました。

①病院名：Lambeth Walk Group Practice (イギリス)

実習科：General Practice 期間：平成26年4月1日～4月25日

②病院名：JOHN A. BURNS SCHOOL OF MEDICINE (アメリカ)

実習科：Department of Anatomy, Biochemistry & Physiology Center for Cardiovascular Research 期間：平成26年5月21日～5月30日

③病院名：Royal Victoria Hospital (カナダ)

実習科：Emergency Medicine 期間：平成26年6月2日～27日

まず、三ヶ月を終えてみて最も変わったと感じるのが、自分自身の「気構え、心の持ちよう」です。実習前は、せっかくのチャンスだから最大限に吸収してこようと自分の学びにばかり執着していました。しかし、それぞれの実習先で素晴らしいメンターと出会い、どのような場合でも、「相手（診察させてくださる患者さん、指導してくださる先生方など）がいてこそ今自分が学ぶことができるのだ！学ばせていただく立場ではあるが、今の自分が相手にできることはなんだろう？」と考えながら、相手と向き合うようになりました。このように一対一の関係性を築こうとする姿勢で臨めるようになったことで、「日本から来たお客さん」としてではなく、工藤由佳として日々の実習、海外での日常生活を充実したものにできたと思います。

別記の実習内容以外に印象に残った事柄についてそれぞれお書きしたいと思い

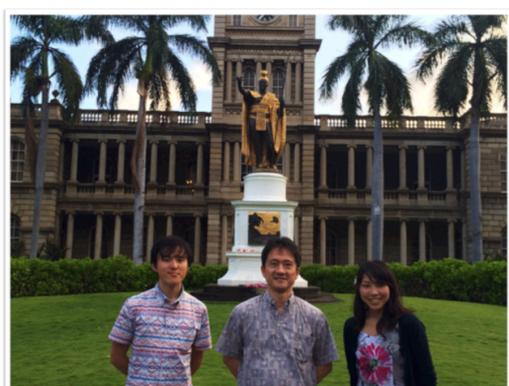
ます。



イギリスでは、女性の上腕皮下に入れる避妊用インプラントや sickle cell disease, ビタミン D 欠乏症（英国の日射量でムスリム女性の衣服を着続けていることが原因と考えられる。）などの日本では経験したことのない症例を学ぶことが出来ました。また、メルティングポットであるロンドンを実感させられるような、患者さんのストーリーをたくさんうかがうことが出来ました。特にアフリカの祖国で虐殺を目撃した女性の無気力な表情、コソボ紛争以来原因不明の足の激痛を訴える女性と彼女の介護を献身的に続ける娘さんの様子は生涯忘れられないと思います。移民が多く、母国語しか話せない患者さんとの会話は、Google 翻訳と身振り手振りで行われていました。そして何よりも Dr.Mitra の情熱的で、分かり易く、ユーモアたっぷりの患者教育を間近で見学できたのが興味深かったです。患者さんには、時に彼自身の人生観も織り混ぜながら話をされるのですが、決して押し付けがましくなく、大変ユニークでした。



5月は、慈恵医大OBの松井隆先生のラボに、春休みと5月前半に準備した虚血再灌流実験のデータを携えて飛び込ませていただきました。必死に準備を整えて臨みました。しかし、松井先生との濃いディスカッションにて、付け焼き刃に頼り切っていたとすぐに気づかされました。もっと本質に根付く「人間力」を磨けというアドバイスをいただき、自分の中にある「変な気負い」がずっと解けました。お忙しい中、未熟な私に、全力で向き合って下さる松井先生のお心遣いに感動しておりましたが、ある時、さらっとおっしゃった言葉が印象的です。「本気ならば誰に対しても、同じ。」だと。



ラボでの研究発表、ディスカッション、ハワイ大学 PBL・解剖実習への参加、SimTiki での救急シミュレーション、Queens Medical Center での Image Conference、Heart Center の見学、軍事関連の病院である Tripler Hospital での Shadowing、Ryuzo Yanagimachi 先生（人工授精を初めて哺乳類で成功させ、現在の体外人工授精の基礎を築かれた。）とのランチタイムなど盛りだくさんのプログラムで、毎日新しい気付き、挑戦、学びがいっぱいでした。実習の醍醐味として、知識だけでなく、それ自体に驚き・感動・感激といった心の動きが伴うことが挙げられると思います。それを存分に噛み締めました。また、真剣に考え、自分の言葉で考えを述べることで相手からの反応をもらう、その積み重ねでその場に自分が存在する意義・意味のようなものが形づくられていくのではないかと考えるようになりました。このたゆまぬ姿勢は、今後世界でサバイバルしていく際に重要だとうかがいました。本実習で、基礎研究の進め方・組み立て方を学び、英語での研究発表を経験できたことも、将来、研究留学を視野に入れている自分にとって大きな収穫でした。

最後に6月の実習についてのご報告です。Independence と Responsibility を強

く求められた1ヶ月でした。最初から、患者さんのところへ一人で行き、一通り問診・診察をし、chartを書きました。所見、鑑別疾患、プランをchartに書いた後、指導医にプレゼンテーションを行い、reviewを行います。その後指導医が診察を行い、検査等へ進むといった流れです。一旦take charge といって担当が決まったら（電子カルテに自分の担当患者として色分けされる。）、自分が行わないと何も進まないの、とにかくやってみるしかありませんでした。特に、直腸診、産婦人科の内診、眼科、整形外科の診察、縫合は一人で行ったことがなく、最初は戸惑いました。患者さんから情報をもらい、もれなく診察し系統立てて鑑別を行い、必要十分なプランを考えるという医師の仕事としては当たり前のことが今の自分には難しく、それを次から次へとこなしていかなければならなかったのが大変でした。手技や表記等における細かな違いも、放置しておくで私が間違っている、理解していないととらえられるので、「日本では～ですが、先生は～されていましてよね。カナダは～なんですか。」というように、1つずつ「知っていること、きちんと観察して考えていること」をアピールするようにしました。毎回最後のフィードバックは厳しいものでしたが、少しずつでも確実に前進できていることが実感でき、次回の目標・注意点も明確に認識することができました。次第に、チームの先生だけでなく、コメディカルの方も「～やっておいたよ。」「今日の調子はどう？」と声をかけてくださったり、担当した患者さんが帰り際にポンポンと私の肩をたたいて「Thank you!」と笑顔で声をかけてくださったりと嬉しいことも増えていきました。悔しい思いをした分、自分の医学に対する勉強の仕方・向き合い方の甘さをしっかりと認識することもでき、すぐに動くつもりでアウトプットを大切にしていこうと考えなおしました。また、患者さんを尊重する姿勢はとても素晴らしい、というお言葉を患者さん、Dr.Welch から頂戴し、自信につながりました。



最後になりましたが、私にこのような貴重な学びの機会を与えてくださった国際交流委員会の先生方に心から感謝いたします。私にとっては3つの海外実習どれも、かけがえのない経験です。今後も、今回学び得た姿勢を実践し続け、患者さんのために良き医療・医学を追究し、精進してまいりたいと思います。